



定例研究会報告要旨

第 1919 回（4 月 8 日）

Boys, be aggressive

（東京大学名誉教授）今村 奈良臣

かつての農業総合研究所が農林水産政策研究所へと機構改革が行われ、政策研究の方法論や課題設定など新たな分野の研究開発の必要性が望まれる中で、特に若い研究者へ大胆に問題提起をして欲しいとの要請が篠原孝所長から私に対してあった。それに答えるべき能力は持ち合わせているわけではないが、私なりの政策研究のつたない研究史の一齣を話すことで若い研究者への問題提起となれば、ということで定例研究会に臨んだ。

表題の“Boys, be aggressive”という言葉（もちろん、“Girls”も含む）は、私が 20 代後半に（財）農政調査委員会研究員として在職していた折りに、当時同財団の事務局長をされていた故東畑四郎氏（農業総合研究所所長もされていた故東畑精一東大名誉教授の弟、元農林事務次官・日銀政策委員）が、ある日ぼつりと話された言葉であるが、若い私には身体の中を稲妻が走る想いであった。いうまでもなくクラーク先生の“Boys, be ambitious”をもじった言葉であるが、その真意は、先輩やいわゆる権威者の反対など恐れずに青年らしく積極果敢に新しい課題に堂々と取り組み、ということだったと思う。かつて農林省の新人職員に訓辞として述べていたらしい。

さて、本論に入って私なりの研究史の要点を述べ参考に供したいと思う。私の研究はおおむね四つの系列の研究に整理できている。第 1 は農業財政・農業補助金に関する研究、第 2 は農業水利・土地改良等農業にかかわる社会資本に関する研究、第 3 は農業構造分析を基礎とした農地政策・農業構造政策にかかわる研究、第 4 は日本の農業・農村の特質に関する研究でありアメリカ、中国な

どとの比較研究も含む研究系列である（それらの要点は配布した資料「第 40 回日本農学賞＝読売農学賞推薦・評価調書」を参照）。

ここでは時間の制約もあるので、20 代から 30 代初めに取り組んだ、補助金研究と農業構造問題研究にしばって話してみたい。

学位論文（「農林国家経費に関する研究」1964.9、東京大学）の作成とも関連させつつ、大学院、農政調査委員会時代を通して研究者の卵の時代は農業補助金の研究を最大のテーマとして取り組んだ。東畑四郎氏は難しい補助金の調査に多大の便宜を与えてくれた。三重県庁の文書庫にこもり補助金に関する資料や統計を自由に検索することができ、併せて市町村、農村諸組織レベルまで実態調査を行うことができ、国—県—市町村—農村諸組織を通して補助金がいかに流され、いかなる政策効果をあげているか、いないかなど解明する糸口ができた。そうした研究成果は『農業補助金の構造』（1965.3）、『農業と社会資本』（1967.3）、『補助金と農業・農村』（1978.12）として世に問うた。特に後者は第 20 回エコノミスト賞を受賞した。現在なお、最大の政策手段である農業補助金に若い方々は是非取り組んで、その改革路線に挑戦してもらいたい。

いま一つ若い時代に取り組んだのが、稲作をめぐる構造問題と農地制度改革にかかわる課題である。新潟・蒲原平野、山形・庄内平野、佐賀・佐賀平坦という日本の代表的稲作地帯の実態調査を踏まえ、当時（1960 年代後半）萌芽的にみられつつあった請負耕作、ヤミ小作などと呼ばれる農地法上の違法行為とも言える事実上の賃貸借の進展の基盤には、農民諸階層間でいかなる稲作生産力の格差が形成され、規模拡大層にいかんにか地代支払い能力が形成されつつあるかを論証し、農地法体制の改革と農業基盤整備の必要性を提示した。米生産費調査の再集計と分析を踏まえ定量的にも問題の所在を明示した。1968 年の日本農業経済学会九州大学大会で報告したが、学会の長老、大家からは激烈な批判（故なき批判と思う）を頂いたが断固、正当性ありと答えた。そういう気概が、どの時代にも、特に若い研究者には求められるのではないかと考えている。